

Jプログラム レポート (2016)

## 『駈込み訴へ』におけるユダの描写

社会情報学部 アレクサンダー・リジェフスキ  
論文指導教員 山内春光

## 目次

	頁
序章	3
第1章 新約聖書におけるユダというキャラクターの描写	4
1-1. マタイによる福音書	4
1-2. マルコによる福音書	6
1-3. ルカによる福音書	6
1-4. ヨハネによる福音書	7
1-5. まとめ	8
第2章 『駈込み訴へ』におけるユダというキャラクターの描写	9
1-1. 『駈込み訴へ』の背景	9
1-2. ユダとイエスの関係	9
結章	13
参考文献	14

## 序章

太宰治は、聖書から深い影響を受け、この作品を書いた時、最初から、自分の作品で新約聖書と旧約聖書の文章を引用したと考えられている。しかし、その引用をきちんと読むと、聖書の言葉の文脈と聖書における文章の文法は、太宰が引用した文章と非常に異なっているということが分かる。文章の引用だけでなく、事件やキャラクターの解釈も伝統的なキリスト教の解釈と違いがある。この『駈込み訴へ』という短編小説におけるユダというキャラクターの描写と新約聖書のユダの描写は、様々な相違点を持つ。そこで、本稿では、新約聖書におけるユダの描写と『駈込み訴へ』のユダの描写を分析し、太宰治がどのようにキリスト教の伝統を解釈したのかということが分かるようにするつもりだ。以下では、聖書のユダと『駈込み訴へ』のユダの結びつきを検討し、作品におけるイエスとユダの関係について論じたい。

## 第1章

### 新約聖書におけるユダというキャラクターの描写

第1章では、ユダに関わる全ての福音書の文章を集め、キリスト教の伝統の中でユダはどのような人かについて論じたい。まず、太宰治が最初に読んだマタイによる福音書の文章を分析し、太宰治が初めて会ったユダを描写するつもりだ。次に、マルコによる福音書とルカによる福音書を一見し、マタイ伝に見つけられないユダに関わる文章について議論したい。最後に、他の福音書と違うヨハネ伝の文章を深く分析し、新約聖書における全体的なユダの描写をまとめるつもりだ。

#### 1-1. マタイによる福音書

太宰治が最初に読んだマタイ伝は、共観福音書の一つである。共観福音書という言葉は、新約聖書の四つの福音書の中でマタイ伝、マルコ伝とルカ伝を示している。その三つの福音書は、共通する記述が多くて、同じような表現に気づくこともできる。そして、聖書学者は、マタイ伝とルカ伝の作家が自分の文章を書いていた時、最も古いマルコ伝を参考にしたと考えている。

伝統的に『マタイによる福音書』は、新約聖書の巻頭に収められる。以下は、『マルコによる福音書』、『ルカによる福音書』、『ヨハネによる福音書』の順番になっている。ここでは、その巻頭の福音書の文章を集め、ユダという人を描写したい。

マタイ伝における最初のユダに関わる文章は次のように記載されている。

十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。(マタイ 10. 2-4)

マタイ伝によれば、ユダはイエスに選ばれた大切な十二使徒の一人である。面白いことに、新約聖書の初めから「イエスを裏切った」人として描写されている。マタイ伝を先に読むと、イエスが祭司長たちを怒らせた時、ユダはユダヤ人の祭司長たちのところへ行っただということが分かる。

そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。そのときから、ユダはイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。(マタイ 26. 14-16)

マタイ伝の作家は、ユダがお金のためにイエスを裏切ったと示唆している。ユダの行為は最低の思想が動機になっていたと思われる。マタイ伝のイエスによると、利己的な動機で行動したユダは、存在しない方がよかった。

夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。一同が食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスはお答えになった。「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」(マタイ 26. 20-25)

最後の晩餐の時、未来を知ってしまったイエスは、他の弟子たちにだれが裏切り者かと示していた。そして、晩餐の後にゲツセマネの祈りの頃、ついにイエスを捕まえようとしていたユダたちが来た。

それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言って接吻した。イエスは、「友よ、しようとしていることをするがよい」と言われた。すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。(マタイ 26. 45-50)

聖書の時代、接吻とは親しいユダヤ人の友の中に使われた挨拶であった。接吻で友達を裏切るのは、最悪な行動であった。イエスが捕まえられた後で、ユダは、反省し、自分の重大な過ちを後悔した。

そのころ、イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちに返そうとして、「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言った。しかし、彼らは、「我々の知ったことではない。お前の問題だ」と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ。(マタイ 27. 3-5)

自分の罪が分かったユダは自殺した。その首吊りや後悔などについては四つの福音書のうちにマタイ伝だけで書かれている。

要するに、マタイ伝のユダは、初めからイエスを裏切った欲深い人として描写されてい

る。しかし、他の福音書のユダの描写と違って、ユダがお金のためにイエスを売った後で、自分の行動を後悔している。その意味では最低最悪な人だったとは言えない。

### 1-2. マルコによる福音書

マルコ伝のユダに関わる文章はマタイ伝と大体同じである。なぜかという、前に言った通りマタイ伝の作家は自分の福音書を書いた時、最も古いマルコによる福音書を参考にしたからである。マルコ伝におけるユダについての文章は、非常に少ない。

まず、マルコ伝の作家は、十二使徒の名前の中でイエスを裏切ったイスカリオテのユダという人を紹介する（マルコ 3. 16-19）。次に、短く祭司長との契約を描写する（マルコ 14. 10-11）。最後に、接吻での裏切りについて語っている（マルコ 14. 41-46）。

マルコ伝には、ユダの感情について一言も書かれていない。マルコによる福音書とは、イエスの生涯に関わる基本的な情報だけを伝えている文章である。だから、本研究にはほとんど意味がない。

### 1-3. ルカによる福音書

ルカによる福音書とは、マタイ伝と同じようにマルコ伝に基づいて書いたものである。だから、最初に、ルカ伝の作家は十二使徒を紹介し、その使徒の中に裏切り者のイスカリオテのユダがいる（ルカ 6. 13-16）。次に、ユダが祭司長たちのところへ行く前に非常に面白いことがあった。

祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた。彼らは民衆を恐れていたのである。しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談を持ちかけた。彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆がいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。（ルカ 22. 2-6）

ルカ伝の作家は、他の福音書の作家と違って、ユダが悪魔に取り憑かれていたと初めて示唆している。「ユダの中にサタンが入った」という文章は、後にキリスト教の中でユダに対する憎しみの一つの原因になった。面白いことに、その文章によれば、サタンに取り憑かれたユダは、裏切りに関わる自己責任がなかった。なぜかという、全部の悪い行動はサタンが計画したからである。後で、ルカ伝には、マタイ伝と同じような最後の晩餐の描写が記載されている。晩餐の時、イエスは裏切り者を示した（ルカ 22. 21-23）。最後に、ユダは接吻でイエスを裏切った。

イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。(ルカ 22. 47-48)

ルカ伝の作家は接吻での裏切りの重要さを強調している。ユダは友達と主に対する大きな犯罪を起こした。

まとめると、ルカ伝の特徴とは、初めてユダに関わるサタンの行動について書かれた文章が入っている福音書である。ユダの感情や欲深さなどについて何も書いてない。

#### 1-4. ヨハネによる福音書

ヨハネ伝は、共観福音書と非常に異なっている。福音書の構成の違いはおろか、多くの新たな文章も入っている。例えば、十二使徒の選択の描写は次のように書かれている。

すると、イエスは言われた「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。(ヨハネ 6. 70-71)

ヨハネ伝には、ユダが裏切り者だけでなく、最初からサタンとして描写されている。ヨハネ伝は最も新しい福音書であるので、おそらくヨハネ伝の作家は、ルカ伝の影響を受け、そのサタンのモチーフを自分の文章に使ったのであろう。次に、他の福音書に見つからないユダに関わる重要な文章が入っている。だから、長くても、全てを引用する価値があると思う。

過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一トラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心に掛けていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていたながら、その中身をごまかしていたからである。イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」(ヨハネ 12. 1-8)

ヨハネ伝を読むと、ユダはイエスと弟子たちの金入れを預かっていた人であったということが分かる。そして、ユダがイエスにナルドの香油の無駄遣いについてそのように言った原因は、その人の大きな欲深さだった。後で、最後の晩餐の前に、イエスが手ぬぐいを

取って弟子たちの足を洗い始めた時、シモン・ペトロはその行動に反対した。そこで、イエスと十二使徒は人の清さについて話し始めた。ついにイエスが次のように言われた。

「あなたがたは、清いのだが、皆は清いわけではない。」イエスは、御自分を裏切ろうとしているだれであるかを知っておられた。そこで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。(ヨハネ 13. 10-11)

未来を知っていたイエスは、弟子たちにだれが裏切り者かと示していた。サタンが入ったユダは、この最低な者であった。イエスが裏切り者を何度も示していたが、弟子たちは何も分からなかった。晚餐の時、イエスはおかしなことをユダに言われた。

「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」と彼に言われた。座に着いていた者はだれも、なぜユダにこう言われたのか分からなかった。ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、「祭りに必要な物を買いなさい」とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていた。ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった。(ヨハネ 13. 27-30)

ヨハネ伝にはくり返し、他の福音書に見あたらない、ユダが金入れを預かっていた人だったという暗示が書かれている。最後に、ヨハネ伝の作家は、他の福音書の作家と同じように接吻での裏切りを描写している(ヨハネ 18. 1-6)。

要するに、ヨハネ伝には、様々な新たな文章とユダに関わる情報が入り、ヨハネ伝の作家によれば、ユダがイエスを裏切った理由は、彼がサタンに誘惑されていたからである。

## 1-5. まとめ

以上、四つの全ての福音書を読み、ユダに関わる文章を集め、新約聖書のユダはどのような人かということが分かるようになった。第一に、太宰治が初めて読んだマタイ伝には、ユダの感情や後悔について少し書いてあるが、全体的にユダは欲深い裏切り者として描写されている。第二に、マルコ伝は、マタイ伝と同じで、新たな視点が含まれていないので、本稿には価値がない。そして、ルカ伝は初めてユダのサタンとの関係について語り、接吻での裏切りに触れ、以前のイエスとユダの友情を強調している。最後に、他の福音書に比べ、様々な相違点を持つヨハネ伝は、悪魔に誘惑されたユダが金入れを預かった人で、盗人であったと暗示している。つまり、ヨハネ伝の作家は、ルカ伝の作家と同じようにユダに対するサタンの影響を中心に置いている。

全ての福音書の作家にとって、ユダは悪い人だった。自分の行動を後悔したとしても、新約聖書の通りにそのような最低最悪な人は存在しない方がよかった。

## 第2章

### 『駄込み訴へ』におけるユダというキャラクターの描写

1939年、太宰治は平和な家庭を得て、落ち着いた生活を送っていた。その時、たくさん世界の文学を読み、その文学の背景を利用し、自分の作品を書いていた。太宰治は、間もなくフリードリヒ・フォン・シラーの作品とギリシャの古代神話に基づいた『走れメロス』や新約聖書の背景とキャラクターに基づいた『駄込み訴へ』などの短編小説を様々な文学雑誌に発表した。この第2章では、『駄込み訴へ』を中心にし、作品の背景にされた新約聖書とユダのキャラクターについて論じたい。

#### 2-1. 『駄込み訴へ』の背景

第1章に述べた通りに新約聖書には、ユダという人が悪魔に取り憑かれていたと書かれている。全ての福音書におけるユダのキャラクターは、世の中の最低最悪な人だと思われる。なぜかという、ユダはイエスを売ったからだ。なぜイエスを裏切ると決めたのか。最も簡単な回答はお金のためであったが、新約聖書には、ユダの感情について少しだけ書いてある。しかし、太宰治は『駄込み訴へ』で、ユダと心を分かち合っ、ユダの恨みについて語っている。

『駄込み訴へ』には、ユダが祭司長たちのところへ行き、イエスである「あの人」を訴える描写がある。ユダは、金入れを預かっていた人で、いつもイエスと他の弟子たちを大切にしていた。悲しいことに、大いに世話を受けていたイエスは、ユダの働きに気づかずに、一度も「ありがとう」のような言葉を言わなかった。それはユダの恨みの一つの原因になった。

そして、祭司長たちにイエスを訴える時、ユダは、イエスの言葉を思い出す。その時、イエスは、ユダの感情が分かっている、次のように言った。「寂しいときに、寂しそうな面容をするのは、それは偽善者のすることなのだ。」(389頁) イエスは、最初から自分の感情を見せるのはダメだと思っていた。だから、ユダは非常に苦しんでいた。自分の愛について言うことができなかった。そのイエスに対する愛が、本当の恨みの原因となった。

#### 2-2. ユダとイエスの関係

太宰治の研究者によれば、『駄込み訴へ』のユダは羨望に囚われていたという。その羨望の原因はヨハネ伝におけるベタニアのマリアであった。つまり、ユダはマリアとイエスの関係を羨望の目で見ている(荒川由美子 2000)。荒川由美子は、ユダがマリアを愛していたと思っている。しかし、その場合にはなぜイエスの代わりにマリアを訴えなかったの

か。『駈込み訴へ』をきちんと読むと、ユダの愛の本質は、男性が他の男性に対して感じた愛だということが分かると思う。

『駈込み訴へ』のユダは直接に自分の愛について語っている。

私は天の父にわかって戴かなくても、また世間の者に知られなくても、ただ、あなたお一人さえ、おわかりになって下さったら、それでもう、よいのです。私はあなたを愛しています。ほかの弟子たちが、どんなに深くあなたを愛していたって、それとは比べものにならないほどに愛しています。誰よりも愛しています。(389頁)

このような文章を読むと、ユダの愛の本質は、ただの友に対しての愛ではないとすぐ理解することができる。『駈込み訴へ』には、以上のようなセリフが多くある。「私はあの人を愛している。あの人死ねば、私も一緒に死ぬのだ。あの方は、誰のものでもない。私のものだ。」(390頁)ユダは、イエスにそのようなことを言えなかったので、仕方なくユダの声が届いた祭司長たちに全てを告白した。しかし、彼は、一度だけ勇気を出し、イエスに自分自身の夢について直接に語っていた。

私には、いつでも一人でこっそり考えていることが在るんです。それはあなたが、くだらない弟子たち全部から離れて、また天の父の御教えとやらを説かれることもお止しになり、つつましい民のひとりとして、お母のマリア様と、私と、それだけで静かな一生を、永く暮して行くことであります。私の村には、まだ私の小さい家が残って在ります。(389-390頁)

ユダは、イエスが救済者だと信じていなかったで、凡人のようにイエスと一緒に生活を送りたかった。その時、ユダは、自分の愛の本質をはっきり分からなかった。そこで、イエスとの将来の生活のため、「よい奥さまをおもらいなさいまし」(390頁)とイエスを応援した。つまり、同性へ恋愛感情を見せるのはダメだと思ったイエスに愛を告白することができなかった。

自分が本当に同性愛者かどうか知らないユダは、ベタニアのマリアがイエスを香油で洗ったことを思い出している時、感激し、イエスとマリアの関係を理解する。

ああ、いまわしい、口に出すさえ無念至極のことです。あの方は、こんな貧しい百姓女に恋、では無いが、まさか、そんな事は絶対に無いのですが、でも、危い、それに似たあやしい感情を抱いたのではないか？(393頁)

荒川由美子が言った通りに、ユダはマリアとイエスの関係を羨望の目で見したが、彼は女性を愛することができなかった。後に、ユダはこのように言っている。「あの人ひとりに心を捧げ、これ迄どんな女にも心を動かしたことは無いのだ。」(393頁)そして、すぐに逆

なことを言っている。「あの人は、私の女をとったのだ。いや、ちがった！あの女が、私からあの人を奪ったのだ。ああ、それもちがう。」（394頁）なぜそのようにユダの気持ちは変わるのか。その時、ユダは自分の性的指向が分からなかったからではないだろうか。イエスとの寂しさについて話を思い出し、最後には自分の恋愛についてはっきり言えなかった。しかし、百聞は一見に如かず、ユダはイエスに洗われたことを思い出し、次のように言っている。「ああ、そのときの感触は。そうだ、私はあ那时候、天国を見たのかも知れない。」（401頁）愛していたイエスのさわり心地はユダの天国であった。

地球上で天国を体験したユダは、なぜその天国を破壊したのか。どうして非常に愛していた人を裏切ったのか。ユダは、後にイエスが十字架にかけられると知っていた。だから、イエスが他人に売られる可能性を消したかった。

もはや猶予の時ではない。あの人は、どうせ死ぬのだ。ほかの人の手で、下役たちに引き渡すよりは、私が、それを為そう。きょうまで私の、あの人に捧げた一すじなる愛情の、これが最後の挨拶だ。私の義務です。私があの人を売ってやる。つらい立場だ。誰がこの私のひたむきの愛の行為を、正当に理解してくれることか。いや、誰に理解されなくてもいいのだ。私の愛は純粹の愛だ。人に理解してもらおう為の愛では無い。（399頁）

その頃、ユダは、自分の将来を見通した。後に誰にも分かってもらえないイスカリオテは、新約聖書の時から現在まで人々に軽視されてしまった。しかし、太宰治は、聖書の事情を分析し、ユダが悪魔に取り憑かれていたのではなかったと示唆している。太宰は、ユダが純粹の愛に取り憑かれていたと言いたかったのではなからうか。

『駈込み訴へ』には、ユダの本当の指向を暗示する他のヒントもある。例えば、祭司長の前にイエスを訴える時、ユダは、何度もイエスが「私と同じ年」と強調している。荒川由美子は、論文の中で「こんな興奮した場面でなぜ年齢が問題なのだろう」（57頁）と問うている。もしかしたらユダは、「イエスは聖なる人ではなくて、私と同じような凡人だ」と言いたかったかもしれない。イエスは、キリスト・救済者ではなくて、他の人々と同じように様々な感情を持った人間だと感じたのではないか。聖書学や宗教学でイエスとユダのキャラクターを比べることは、長い歴史と伝統がある。一つの古い実例は、クルアーンにおけるユダの描写である。クルアーンには、人々がイエスとユダの姿を間違えて、イエスの代わりにユダを十字架にかけたとある（クルアーン4. 156-158）。これについて、ユダはイエスの悪いドッペルゲンガーとされることもある。もし太宰治がユダをイエスのドッペルゲンガーだと思ったとしたら、そのドッペルゲンガーの悪さは男に対する禁止されていた恋愛だったかもしれない。だから、ユダは、そのように何度もイエスとの同年の関係を強調しているのではなからうか。

『駈込み訴へ』は、ユダが銀貨三十枚をもらう所で終わる。したがって、第1章で論じた接吻のシーンは、『駈込み訴へ』に見つけることができない。本研究では、前にその接吻の挨拶の重要性を説明した。愛していたイエスのさわり心地が天国だと思ったユダは、

その最後の接吻のため、言い換えれば、愛のため、イエスを裏切ったら、大切にしていた主の心地いいキスをもう一度体験することができると思った。太宰治は、そのことについて何も書いていないので、この論は根拠が弱い推測にとどまる。しかし、ユダの心が分かった太宰治の分析をさらに詳しく検討してみたら、そのようなユダの気持ちを想像することができる。イエスに対するユダの恋愛は、棘のような愛であっても、大きな愛だった。

悲しいことに、ユダの愛は禁止された片思いの愛だった。聖書の時代に、ソドミーは大きな犯罪であった。その犯罪に対する罰は、この世での処刑の中で最も苦痛が多いとされる石打ちで、あの世で地獄に落ちる可能性があった。だから、イエスは、ユダの感情が分かって、彼を無視することにした。イエスにとって、同性愛という犯罪を犯した人は「生れて来なかったほうが、よかった」。

## 結章

まとめると、太宰治は新約聖書の時代背景を使って、普遍的な問題について語っていた。片思いや同性愛は、大切な世界文学のモチーフである。他方で、太宰治は、新約聖書の作家と違って、ユダの恨みを理解し、新約聖書に見つけることができないユダの裏切りの原因を明らかにしてみせた。

キリスト教の信者の立場から見れば、『駈込み訴へ』という短編小説は冒とくであろう。しかし、太宰治にとって、新約聖書とは、人々の問題について書かれた文学の名作であった。だから、太宰治は自由に聖書の背景を利用し、現代的な問題に触れる素晴らしい文学を書くことができたと思う。

【参考文献】

『聖書 新共同訳』、日本聖書協会。

『聖クルアーン：日亜対訳・注解』、日訳クラーン刊行会。

太宰治「駆込み訴え」（『斜陽 人間失格 桜桃 走れメロス 外七篇』文春文庫 2000年 所収）。

荒川由美子「『駆込み訴へ』と聖書」（『文学と教育』188-9号、51-60頁、2000年）。